わが国における近代科学としての心理学を創始した
代表者の学問的業績の総体を現代語化して集成刊行。

元良勇次郎著作集

全14巻 別巻2

没後100年記念出版　監修：大山　正

編集：『元良勇次郎著作集』刊行委員会（主幹＝大泉溥）

クレス出版

監修のことば

元東京大学教授　大　山　　正

このたび、元良勇次郎没後100年を記念して、彼の『著作集』全14巻＋別巻２巻の刊行を開始することになった。これはわが国における近代心理学の創始を代表する者の学問的業績を集成するものである。

元良勇次郎（もとら・ゆうじろう）は幕末の安政５年（1858）に現兵庫県三田（さんだ）市で儒学者杉田泰の次男として生まれた。後に明治14年（1881）元良家の婿養子となり、元良姓に変わる。明治維新後、洋学に強い関心を抱き、神戸のアメリカ人宣教師デイヴィス宅に書生として住み込みながら英語と洋学を学び、明治７年（1874）16歳で洗礼を受けてキリスト教徒となる。翌明治８年（1875）には同志社英学校に第一期生として入学して修学した後、明治12年（1879）に上京し、耕教学舎（翌年東京英学校、明治16年東京英和学校と改称、現青山学院）の教師となり、傍ら東京大学の選科生として数学を学ぶ。

海外留学の念が止み難かった彼は、明治16年（1883）に東京英学校と同系列にあったボストン大学を留学先に選び渡米した、さらに1885年にはジョンズ・ホプキンス大学大学院に入学し、ドイツ留学から戻ったばかりのスタンレー・ホールの指導下で心理学を学ぶことになる。同大学で彼が履修した科目は多岐にわたっている。中心はもちろん心理学であるが、哲学史、教育学、倫理学、論理学、数学、生理学、財政学、経済学まで含んでいて、彼の関心の広さを示している。その間、彼は心理学実験実習に参加修得するとともに、ホールの指導で、漸次的変化中の重さの弁別閾測定の実験に従事し、その成果をホールと連名で米国心理学雑誌の第１巻に発表している。彼は1888年に Exchange：Considered as the Principles of Social Life を博士論文として Ph. D. の学位を取得して帰国した。両論文とも、本著作集第１巻に収録されている。

明治21年（1888）７月に帰国した彼は、東京英和学校の教職に復帰して校長となり、また帝国大学文科大学（現東京大学文学部）講師として「精神物理学」（第２巻収録）を講じた。その２年後の明治23年には帝国大学教授に就任し、大正元年（1912）に逝去するまで、その地位にあって、広く活躍することになる。元良以前にも帝国大学において心理学は外山正一らによって講じられていたが、彼らは心理学の専門家とは言えず、実験を含む心理学の専門的教育は元良に始まる。心理学実験室の建設も彼が大いに努力したところであり、明治36年（1903）に旧病理学教室を改築した独立の建物として実現させた。明治38年（1905）にはローマで開催された第５回国際心理学会議に出席し The Idea of Ego in Oriental Philosophy（第10巻収録）について講演している。明治39年（1906）には帝国学士院会員となっている。

元良勇次郎はまさに明治時代を生き抜いた極めて意欲的な学者であり、わが国の心理学の創始者であるとともに、心理学者・進歩的な知識人の立場から様々な社会問題にも多くの提言をしている。彼は米国で習得したものを単に日本で紹介・普及しただけではなく、留学中に習得した自由な発想法に基づいた彼自身の独自の見解を勇敢に主張していた。そのうちの幾つかについて紹介すると、児童における注意の研究（本著作集の第９・11巻収録）、縦書き・横書き、平仮名・片仮名表記問題（第５・９巻収録）、参禅体験（第６巻収録）、心身関係（第11・12巻収録）、社会心理（第１・５巻収録）、青年論・女性論（第１・９・12巻収録）などがある。

元良の著作は、100年以上たった現代でも、読者に多くの示唆と勇気を与える、非常に価値あるものである。しかし、入手困難なものも多く、しかも彼はアメリカで高等教育を受けているが、幼少の頃に儒学を学んだ明治の学者であって、現代人には難解な語句やなじみのない表現も少なくない。この『著作集』ではカタカナ遣いや変体仮名・略字などを現代文にして難読漢字には（ふりがな）を付けたので、平成の読者にも親しみやすく、また原本印影複写の CD-ROM を『別巻２』の付録とすることによって、厳密な研究資料としても活用可能となっている。

一人でも多くの人々に接して頂けることを祈念したい。

『著作集』企画の趣旨と編集の特徴

１．企画の趣旨

（１）　近代日本における科学的心理学の開拓者を原著で再現

元良勇次郎（1858～1912）は、わが国最初の心理学実験室を東京帝国大学に創設して近代科学としての心理学を開拓した人物であり、独創的な研究の傍ら、多くの後進の育成に尽力した。当時の心理学は単なる欧米新知識を移入する域を脱して本格化しつつあった明治アカデミズムの一環として、とりわけ人文社会科学（教育学・哲学・倫理学、社会学・経済学・政治学・歴史学・文学など）の基礎学となるよう期待されていた。そんな時代に元良勇次郎はわが国最初の心理学教授として専門的な研究・教育の傍ら、その社会的普及に務め、さらには心理学を駆使して明治期後半の第１級の学者・知識人として活躍した。その活動の軌跡を示す資料は多岐にわたるが、その多くが散逸しつつある。これらを意識的に蒐集・整理することは日本心理学のルーツに迫り、原著で実像を再現するのに不可欠である。つまり、この『著作集』の編纂は、独り心理学界だけでなく、哲学・倫理学・社会学・教育学・近代日本思想史など近接諸科学からの要請にも応えるものである。

（２）　元良勇次郎没後100年記念としての『著作集』刊行の意義

元良勇次郎の生涯と業績は、故元良博士追悼学術講演会編『現代の心理学』1913や主著『心理学概論（遺稿）』1915が出版され、これらをもとに、従来の日本心理学史の研究では、元良勇次郎の心理学説が直弟子の福来友吉や松本亦太郎をはじめ、城戸幡太郎・梅津八三・苧坂良二などによって検討されてきた。また、哲学関係でも明治の三大唯物論者の一人、カントの認識論（批判哲学）、ヘーゲルの弁証法、ブールの記号論理学などの受容が注目され、さらには東洋的自我論の構築、発達遅滞児の注意訓練法を開発して欧米に伝えたことも無視できない。他方、国内的には大日本帝国教育会の中に「児童研究組合」を結成、『児童研究』誌の創刊（日本児童学会の会長）、社会学研究会の結成（機関誌『社会』創刊）、『哲学雑誌』の編集、丁酉倫理会の代表を務め、心理学会（東京）を結成し研究例会だけでなく心理学通俗講話会の開催、『心理研究』誌の発刊などを指導した。さらに、有名な「教育と宗教との衝突」論争や「倫理学」論争などで論陣をはる一方、日清戦争で大量発生した戦争未亡人問題と儒教的貞女思想との矛盾を指摘し、青年の自殺問題などにも実証的にコミットした。さらに、若き日には青山学院や正則中学（現高校）の創設に尽力し、東京高等師範学校教授の兼務など教育界への寄与も多大であった。

ところが、1989年の兒玉齊二（当時・日大教授）による Exchange : considered as the principles of social life. 1888の再発見（従来、元良の Ph.D. 論文は G.S.Hall との共著 Dermal sensitiveness to gradual pressure changes. 1887を含む実験研究だと見なされていたが、じつは社会学的な論文 Exchange だったという事実の再発見）を契機に、日本心理学史の再検討がなされ、一定の段階に達したので、明治期心理学者を代表するものとして、この『元良勇次郎著作集』を刊行する。時あたかも元良勇次郎没後100年にあたる。

２．編集の特徴

上記の企画趣旨に基づき、元良の学的業績を総合的体系的に構成して、学術用語に留意して現代語に翻訳・編集して出版する。

収録の対象は元良勇次郎の執筆した著書や論稿はもとより講演記録や雑誌記者の面談記録も探索蒐集して、それらの内容を吟味し内容重複の場合には文献的価値の高いものを収録（その文献末末尾に《翻刻者注》で関連文献の存在を注記）した。また、翻訳は『ヴント氏心理学概論』以外は割愛し、歴史書も執筆者ではないのは対象外とし、門弟などの著書の校閲も除外した。

著作集の編成では、明治期という時代性と元良勇次郎の学的展開という観点から、以下の時期区分を全体的枠組として、各巻では文献を領域別に配置した。

第Ⅰ期：初期著作：同志社の学生時代、北米留学時代、帰国直後の東京英学校教師時代（元良30歳まで）	**第１巻**
第Ⅱ期：1890明治23年～1900明治33年まで（元良31～42歳）	**第２巻～第８巻**
第Ⅲ期：1900明治33～1906明治39年まで（元良42～48歳）	**第９巻～第10巻**
第Ⅳ期：1906明治39年～1912大正元年（元良48～54歳）	**第11巻～第12巻**
追　補：**『論文集』**（1891-1907）と遺稿の**『心理学概論』**	**第13巻・第14巻**

なお、元良勇次郎関係資料を集成した**別巻１**と、収録文献の解説・総索引・原本印影の CD-ROM を内容とする別巻２をつけて、全14巻＋別巻２冊とした。

この著作集では原本の印影複写ではなく、現代語に翻訳することにした。これは、原文の表記法が現代とは相当に異なり判読が容易でないと考えたからである。具体的にはカタカナ遣いはひらがな遣いにして変体仮名や送り仮名を含む旧仮名遣いを現行のかな使いに改め、必要に応じて句読点を追加した。また、旧漢字は現行漢字に変換し、難読漢字には（ふりがな）をつけるなど、現代文に翻訳した。その際、明治期心理学界をリードした元良勇次郎による各個文献の学術用語はとくに保持し〔現行用語など補足を注記〕、別巻２に「総索引」で主要用語の推移を確認できるようにした。また、収録文献が入手困難なものが少なくないので、研究の便宜として別巻２に原本を印影複写したＣＤ－ＲＯＭを付ける。

各巻冒頭の「凡例」で、その巻の編集概要を示した。また、各文献の末尾に【出典】と翻刻者を示し、必要に応じて《翻刻者注》で当該文献の補足説明や類似文献の存在などの「書誌情報」を記した。

元良勇次郎の古典的著作を原文に忠実で、しかも読みやすい現代語訳で集成し、学術的価値を保持した画期的な『著作集』である。

（編集主幹：大泉　溥）

『元良勇次郎著作集』全14巻 別巻２　構成

第１巻　初期著作：『教育新論』・Exchange・留学前後の論稿

Ⅰ．『教育新論』（中近堂1884）
Ⅱ．アメリカ留学前の論稿
投書　火事のはなし（1876）、紀州和歌山伝道の景況（1878）、抄訳（英人テンケストル述）「バクテリヤ」〔黴菌の一種〕の説（1881）、動物喫食の説（1881）
Ⅲ．アメリカ留学から帰国直後の論稿（1888～1890）
１．**心理学**　米国心理学の近況（1888）、愛情論（1889）、愛国の心理（1889）、精神啓徴を読む（1889）、心理と教育との関係（1889）、心理学と社会学の関係（1889）
２．**教育・社会**　米国普通教育の景況（1889）、国家と教育との関係（1889）、米国の女子（1888）、小説を読むの利害（1889）、文学と開化の関係（1890）、日本歴史を学ぶの要を論ず（1888）、所有物の性質を論じて社会主義を評す（1888）
３．**倫理・道徳**　社会の道徳（1888）、功利と美麗（1888）、富と道徳（1889）、社会の道徳と自殺との関係（1889）
Ⅳ．アメリカ留学時の英語評論
Hall, G. S. と共著 Dermal Sensitiveness to Gradual Pressure Changes.
Exchange：Considered as the principles of social life.

第２巻『精神物理学』・『生理的心理学講義』・欧米心理学の動向

１．「精神物理学」（1889～1891）　２．米山保三郎共著『生理的心理学講義』（高等学術講義第５冊、1897）
３．欧米心理学の動向　（1890～1898）
ゼームス氏心理学を読む（1891）、ラッド氏の知覚論を評す（1892）、現今の心理研究の位置（1895）、ヴントとヘルバルトの心理説（1895）、ヴント氏心理学綱要の緒論（中島泰蔵と共著1897）、ヴント（Wilhelm Wundt）小伝（1898）

第３巻『心理学』・『心理学十回講義』

１．『心理学』（金港堂1890）　２．『心理学十回講義』（冨山房1897）

第４巻『倫理学』・倫理問題教授法の調査

１．『倫理学 増訂版』（小野英之助1894）　２．「倫理問題（調査依頼）」（金港堂1891）、「倫理問題回答の報告」（1891）

第５巻　論稿（1890～1900）：心理学・教育・社会（1）

Ⅰ．心理学
１．**心理実験の必要と実験器機の作成**　不思議の図を解明す（1890）、心理実験の必要（1895）、採決器に就て（1891）、文科大学心理学実験室参観（1898）
２．**心理学実験・調査の報告**　元良博士心理実験談（1895）、横読縦読の利害に就て（1895）、再び横読縦読問題に就て（1895）、白内障患者の視覚に関する経験（松本孝次郎と共著1896）
３．**独自な学的展開**　月と心理学の関係（1891）、心の勢力（1891）、勢力保存法と心との関係（1892）、物理界と人事界との比論（1892～1894）、心理現象の分類法に就て（1895）
４．**感情・情緒・動機**　感情の表出（1891）、恥辱の感情に就て（1894）、情の力（1894）、気質論（1895）
５．**変態・異常心理**　呉秀三氏の『精神病者の書態』を読む（1892）、一体二心の人（1898）
６．**児童研究と教育心理**　児童の心情研究に就て（1895）、小児心理学（1897～1898）、児童心理（1900）
Ⅱ．教育論
元良文学博士の教育意見（1897）、教育者の務（1891）、地方教育論（1894）、中等教育に於ける倫理問題（1899）、観念連合と倫理教育との関係（1899）、宗教と教育との関係に就て（1893）、政治と宗教と教育（1894）、教育に関する卑見（1895）、教育と宗教との関係（1900）
Ⅲ．社会（1）：社会学・社会心理学
社会学の範囲及び性質（1891）、青年会に於て「日本の社会を研究する必要」（1893）、社会心理学（1895）、社会心理学（1897）、生活の標準（1899）、社会（1897）

第６巻　論稿（1890～1900）：社会（2）・哲学・倫理・宗教

Ⅰ．社会（2）：民俗・経済・政治・歴史
大器果たして世に容れられざるか（1892）、人民の風俗に就きて（1891）、心理学と風俗との関係（1892）、民俗論（1893）、完全なる結婚の基礎（1896）、再婚と貞節との関係（1896）、再婚論（1897）、与論の変遷と国家の盛衰（1891）、自殺と社会進化との関係（1897）、アトランタ島と日本の関係（1889）、鳥尾子爵の演説筆記を読む（1890）、辞職及び脱党に就て（1891）、非男尊女卑を論じて和田垣法学博士に質す（1891）、死刑存廃の討議（1900）
Ⅱ．哲学・倫理学・宗教
１．**哲学・科学思想**　原因と結果との関係及び自発（1893）、標準科学と説明科学との関係に就きて（1899）、人生観に就て（1895）、知行合一説に就きて（1897）、『我観小景』を読む（1893）、加藤博士の強者の権利の競争を読む（1894）、破唯物論を読む（1898）
２．**倫理学の問題**　倫理学は哲学か将た科学か（1890）、大西君に答ふ（1890）、倫理学は実践の学に非るか（1894）、現今の倫理的懐疑に就て（1899）、天理と人情との関係を論す（1892）、自由と従順（1892）、正義の観念を進化（1893）、新法典と倫理との関係に付き調査報告（1892）、西洋倫理と孔孟主義（1892）、孔子の精神に関して所感を陳ぶ（1895）、道（1895）、礼儀論（1895～1896）
３．**宗　教**　参禅日誌（1895）、主義と宗教との関係を論じて日本主義に及ぶ（1897）、禅と心理学との関係（1897）、宗教上内心の経験とは果たして何を謂うか（1898）、宗教観念の研究（1900）

第７巻『修身学』・『倫理講話』・『倫理及宗教』

１．『修身学―尋常師範学科講義録―』（明治講学会1894）　２．『中等教育倫理講話（前編・後編）』（右文館1900）
３．『現今将来倫理及宗教』（勉強堂1900）

第８巻『ヴント氏心理学概論』　訂正再版　中島泰蔵共訳（冨山房1899）

第９巻 論稿（1900～1905）：心理学・教育・社会・哲学

Ⅰ．心理学
１．**心理学の動向と課題**　現今の心理学の状態に就て（1901）、輓近の心理学（1903）、心理学者としてのスペンサー及ベイン（1904）、一九世紀に於ける欧米大著述に就いての諸家の答案（1902）
２．**実験・調査の報告**　日本現時学生の宗教心に関する調査の報告（1900）、注意作用の研究（1900）、神経の伝達作用に関する研究（1903）、松本亦太郎共著『片仮名平仮名の読み書きの難易に関する調査』（1904）
３．**心理学の論説・講演記録**　『愛と心』の小説に就て（1901）、判断作用の研究（1902）、意志と自然力の関係に就て（1903）、青年の想像（1903）、講話　意思作用（1904）、意思系統に就て（1904）、人格と天才（1904）
Ⅱ．教育・社会
１．**教　育**　人は何の為に努力競争しつつあるか（1902）、生存競争と品性陶冶との関係（1903）、戦時と教育（1904）
２．**社会・民俗**　社会進化の目的に就て（1901）、社会と個人との関係（1903）、封建制度に依て受けた日本国民の弱点（1903）
Ⅲ．哲学・倫理・宗教
１．**思想・哲学**　思想の変遷に就て（1901）、加藤博士の愛己心及び其批評を評論して井上博士の大我説に及ぶ（1901）、哲学の変遷と新系統（1902）
２．**倫理・道徳・修身**　道徳上の根本問題につきて（1901）、青年と修養（1903）、女子修養論（1903）、科学と修養（1904）、修養常識の養成に就て（1903）、常識の解並に其養成法に就て（1904）、外人より見たる武士道（1905）
３．**宗　教**　現今の倫理及宗教問題に就て（1900）、談話　将来の宗教（1902）、コントの所謂人類教の立脚地より見たる釈迦牟尼（1903）
４．**欧　文**　A study on the conductivity of the nervous system.（1903）

第10巻　『心理学綱要』・教育的心理学・東洋的自我

１．『心理学綱要』（弘道館1907）　２．心理学講義（1908～1912）
３．教育的心理学大要（榊保三郎編『異常児の病理及教育法 上』冨山房1909）
４．百科辞典の項目など　心理学（1911）、心理学の興感（1912）、意識、自全経験、不全経験、主我系統、主自然系統、所依概念（1912）　５．東洋に於ける自我の観念（1905）　６．欧米歴遊実験談（1905）
７．欧　文　The idea of ego in oriental philosophy.（1905）、*An Essay on Easteren Philosophy*（*Idea of ego in oriental philosophy*）.（1905）、Essai sur La Philosophie Oriental.（1905）

第11巻　論稿（1905～1912）：心理学・注意練習・教育

Ⅰ．心理学
１．**心理学の動向と課題**　心理学　意識界と物質界と関係（1906）、人為対自然力（1908）、現今に於ける心理学上の問題（1908）、近世心理学の傾向（1909）、心身の関係（1909）、〔付録〕応問　運動感覚の生理的心理的説明・努力の力源（1912）、遺伝と伝染：児童問題の二方面―氏と育ち―（1910）、現時心理学上の問題（1911）、力学上より見たる心理学（1911）、顕心儀に就いて（1911）、〔付録〕大槻快尊・高橋穣「応問 顕心儀に就いて」（1913）、個人意識と社会意識（1911）
２．**心理学の論説・講演記録**　日本人の体質体格の改良につき（1907）、品性修養の心理的基礎（1908）、先見作用（1910）、知的作用と意志作用との発達上の関係に就て（1910）、心理学より観たる利巧と間抜け（1910）、児童研究（1912）、意志と自然力（1911）、意志の修養（1910）
３．**人格・自我・変態（異常）**　人格の核（1906）、人格に就て（1909）、渡邊徹著『人格論』序（1912）、自我の観念（1910）、児童の自我観念（1911）、夢に就て（1906）、潜める意識に就て（1908）、心霊的現象研究に就て（1908）、精神療法に就て（1910）
４．**心理学研究運動への寄与**　『児童研究』創刊の祝辞（1898）、日本児童研究会第５回総会：開会の辞・閉会の辞（1910）、心理学通俗講話会 開会の辞（1909）、心理学通俗講話会１周年の挨拶（1911）、『心理研究』発刊の趣意（1912）
Ⅱ．注意の心理・教育
注意練習器（1906）、注意力の養成に就いて―精神の体操（1906）、低脳児に就き実験せる報告（1907）、注意練習の実験に就て（1909）、精神の操練に就きて（1907）、低能児研究と其教育（1908）、低能児童教育の一法（1906）、低脳児分級の可否に就て－低能児学校を設くるを理想とす－（1908）、遅性児童教育研究所設立趣意（1908）、精神操練に就て（1909）、注意の話（1912）
Ⅲ．教　育
国民教育に及ぼす文学の影響（1906）、育ちより氏（1908）、遺伝と教育（1909）、天職としての児童教育（1909）、実業と倫理教育（1909）、社会教育に対する希望（1909）、現代女子教育に対する所感（1910）
Ⅳ．欧　文　Ein Experiment Zur Einübung von Aufmerksamkeit.〔注意実験〕（1911）

第12巻　論稿（1906～1912）：社会・哲学・倫理・宗教

Ⅰ．青年・女性・社会
１．**青　年**　時代と青年（1906）、厭世と自殺（1906）、現代青年の煩悶解決に就て（1906）、青年と大望心（1907）、青年特性発揮法（1907）、現代青年の思潮に就て（1908）、青年期以後に於ける精神の変遷（1909）
２．**女性・家庭**　方今の女子問題（1906）、新家庭の任務（1906）、婦人の悪癖矯正法（1907）、婦人問題の研究（1911）、婦人は広く浅く学ぶべし（1911）、社会の調和剤としての婦人（1912）

3．**社会（民俗・経済）** 近世風俗の変遷に就て（1906）、ボォトミイ氏著『英国国民』を読む（1906）、外遊所感（1906）、奮闘的国民の家庭（1906）、文明の要素（1906）、社会各種の病弊を救済する全体を統一した方針がない（1910）

Ⅱ．哲学・倫理・宗教

1．**思想・哲学** 個人主義と家族主義及び国家主義（1906）、科学と哲学（1906）、哲学と科学の範囲（1907）、国民の発展と思想の変遷（1909）、心とは何ぞや（1909）、ヘゲルの存在論に就て（1909）、プラグマチズムに就て（1910）

2．**倫理・道徳・修身** 西洋思想と精神修養との関係（1906）、国民品性の修養に就て（1907）、日本将来の倫理（1907）、儒教復活に就て（1908）、科学と道徳（1911）、判断と修養（1912）、理論家と実行家（1909）、文学的趣味と情的生活（1909）、吾人は死後に何を残すべきか（1909）、常識論（1910）、四十七名士の四十七義士観　美しい戯曲として味う（1910）、忠孝と人道（1911）、大和魂の神髄（1911）、義侠的精神の利用奈何（1911）、戦を好むか平和を好むか（1911）

3．**宗　教** 禅の特質（1906）、宗教と理性（1906）、精神修養上　宗教と科学の関係（1906）、余の観たる禅学（1908）、国民生活と宗教（1909）、仏教の長所と短所（1910）、禅と精神修養（1910）、宗教家会同に就いて（1912）

Ⅲ．欧　文 Conflict of religion and science : From a Japanese point of view. (1905)

第13巻　論文集（弘道館1909）

動機論 、月の大さに就て、快楽の種類及其の性質、悪の性質、心理学と経済学との関係、人格の種類、文明の進歩と制裁の変遷との関係、思想の発達と形式論理との関係、快楽は倫理の標準と為り得べきや、精神の修養に就きて、趣味と技術との関係、疑惑と信念、心理学と認識論との関係―特にカントの空間論を評す―、道徳的満足の感情に就て、宗教上の信念と倫理上の信念、自然界に於ける人類の機能に就きて、無用なる学問の効用に就て、善と美との関係、心理学上より見たる品性の修養、ダルインと心理学、遺伝と教育に就て

第14巻　『心理学概論』（丁未出版社1915）

別巻1　元良勇次郎関係資料

第Ⅰ部　伝記資料

1．**人物紹介・伝記・人名事典より** 文学博士 元良勇次郎（1892）、文科大学教授文学博士 元良勇次郎先生略伝（1900）、文学博士 元良勇次郎氏（1912）、自己紹介「予が読書法」（1906）、故元良博士評伝（姉崎正治1913）、高潔簡易なりし故博士の生涯（綱島佳吉1913）、元良勇次郎（高橋穣1926）、元良勇次郎（『教育心理学事典』金子書房1956）《付録》元良勇次郎（渡邊徹1954）、『元良勇次郎博士小伝』（中谷一正1968）、元良勇次郎（針生清人1982）

2．**伝記関係資料 ――諸氏の追憶による元良勇次郎伝記『元良博士と現代の心理学』弘道館**（1913） 幼少時代（高島平三郎）、同志社時代（中島力造、海老名弾正）、学農社および東京英学校時代（小崎弘道、和田正幾）、米国留学時代 ⅰ ボストン大学の時期（中島力造、蔵原惟廓）、ⅱ ジョンス、ホプキンス大学の時期（長瀬鳳輔、渡瀬庄三郎）、大学時代 ⅰ 講師及教授の初期（大瀬甚太郎、井上哲次郎、塩澤昌貞、内堀維文、中島泰蔵、速水滉、蛎瀬彦蔵）、ⅱ 第二次洋行期（元良勇次郎、丹波敬三、谷口吉太郎、永井潜、麻生正蔵）、ⅲ 教授の後期（桑田芳蔵、大槻快尊）、追懐三十年（松本亦太郎）、《付録》明治年間に於ける心理学発達の史料（東京心理学研究会編1913）

3．**元良勇次郎逝去・葬儀・新聞報道・履歴・業績などの関係資料** 元良勇次郎終焉の記録（1913）、追悼集会と新聞報道など（1913）、《付録》元良勇次郎の蔵書などの東京大学への寄象贈、元良勇次郎の履歴と業績

4．**元良勇次郎逝去の追悼文** 故博士の私宅の生活（布川孫市1913）、学者としての元良先生（姉崎正治1913）、人格から受ける教訓（桑木厳翼1913）、創始的な特殊講義（野上俊夫1913）、学界の明星堕つ（樋口秀雄1913）、児女の教育に注意した人（山田菊三郎1913）、友誼に敦い故博士（三浦周行1913）、穏田の森の密議（岡田哲蔵1913）、人格の人 元良教授（角帽子1913）、故博士の宗教思想（海老名弾正1913）、G. S. Hall, E. C. Sanford などの追悼文（1913）

5．**元良勇次郎についての回想記** 元良先生を憶う（神田左京1918）、元良先生十年忌（上野直昭1923）、先生の思い出（渡邊徹1950）、元良先生と私（荻原清泉水1970）、《付録》顕彰碑 経過報告（泉丈1970）

第Ⅱ部　元良勇次郎の心理学

元良先生の心理研究に於ける一般的意向と其の結果（福来友吉1913）、元良博士の心理学研究法（松本亦太郎1925）、《付録》日本に於ける心理学の発達（松本亦太郎1937）、意識の表現性と精神的動作―日本心理学史の序曲を奏する一つのラプソディー―（城戸幡太郎1931）、元良勇次郎の実行心理学と自全実在の問題（城戸幡太郎1950）、《付録》MANTARO KIDO : ORIGIN OF JAPANESE PSYCHOLOGY AND ITS DEVELOPMENT（1961）、元良勇次郎博士の心理学の基本思想（高橋穣1964）、元良勇次郎の心理学（木村禎司1967～68）、《付録》元良勇次郎（木村禎司1960）、元良勇次郎の心理学と哲学（今谷逸之介1967）、黎明期の日本社会心理学―元良勇次郎と社会心理学の萌芽（佐原六郎1968）、元良勇次郎先生と日本の心理学（今田恵1970）、《付録》『元良先生追慕集』序のことば（相良守次1970）、元良勇次郎とその後（三好稔1974）、元良勇次郎の心理学と知行合一の教育方法（松本金寿1976）、《付録》（講演会開会）「あいさつ」「まとめ」（城戸幡太郎1976）、人文科学裏面史　精神物理学のあと始末（小野泰博1977）、明治期における社会心理学の受容・形成過程の研究（安倍淳吉1984～1985）、元良先生と心理学（梅津八三1987）、《付録》元良勇次郎（関計夫1967）、初期実験心理学の人びとと心理学の発展（芋阪良二1989）、元良勇次郎の『精神物理学』―心理学用語の比較文化的考察―（児玉斉二1987～1990、1993）

第Ⅲ部　元良勇の次郎の哲学・倫理・宗教・科学思想

哲学会史料序説（伊藤吉之助1912）、元良勇次郎（井上哲次郎1932）、唯物論（鳥井博郎1935）、「ヘゲルの存在論に就て」解説（三枝博音1936）、元良勇次郎におけるヘーゲル弁証法の理解（船山信一1966）、明治哲学における記号論理学の理解―元良勇次郎の場合（船山信一1965）、元良勇次郎の思想とその自然科学的背景（杉田元宜1978）、元良勇次郎における自然と人間（渡辺和靖1981）、元良勇次郎の倫理思想（木村禎司1981）、創設期の同志社と日本の心理学（竹中正夫1989）」

〈付録〉研究文献目録・年譜

1．**日本心理学史と元良勇次郎研究の文献目録** 日本心理学史と元良勇次郎に関する文献（1980年代以前）、日本心理学史に関する図書（1990年代以降のもの）、元良勇次郎に関する研究論文（1990年代以降のもの）

2．**元良勇次郎年譜**

別巻2　著作集の解説・総索引（事項人名）、原本複写のCD-ROM

■第2巻『精神物理学』

第八回　注意試験法

第八回

注意試験法

前回に述べたように、注意は常にリズムの性質をもつものであって、その活動の状況に浮沈がある。それこそ、精神全体がこのリズム的な性質をもつことを示すものである。それゆえに、文学の初めに詩歌が起こったのは、このリズムの性質に由来するものである。また、舞踏が起ったのも非常な昔に始まり、同様にこのリズムに起因するものである。そして、このリズムについては後に、一章を設けて論じようと思う。今ここでは前回の終わりに述べた注意のリズム的性質との関係をさらに詳細に論じ、注意と記憶が密接に関係することと注意の発達などを示すことにする。

精神現象中で最も注意を要することは、印象が明らかにあらわれたときではない。むしろ、現象がかすかな時にある。それ故に、注意の試験をしようとするには、最もかすかな精神現象が必要である。独逸（ドイツ）においてランゲー〔ランゲ、F. Lange＝翻刻者〕がおこなった方法を示すと、氏は視覚及び聴覚で、これを試みた。暗室に入り最もかすかな一点に注意して、これを見つめた。そうすると、その点は意識と無意識との境界に有るので、現れてかくれ、かくれてまた現れる。これは、その点が変化するのではない。その点が脳中にあたえられた刺激と注意との関係で、このように浮沈を起すのである。試験者〔実験者＝翻刻者〕はその浮沈を記録するため、そこに装置を用意して、その点が明らかに現われるたびにそれを記号〔応答＝翻刻者〕する。その所から隣室まで電信を用いて、これを送る。また、隣室では精密にこれを記録する器械を用意する。このようにして、注意のリズムが幾秒毎に浮沈するのかを調べることができるのである。すなわち、第一図に

■第3巻『心理学』

元良勇次郎『心理学』金港堂　1890（明治23）年

身体の反動力（反応する力＝翻刻者）

そもそも、動物の身体は神経と筋骨から成（な）るものであり、その他の消化機（ママ）、肺臓、血液、脂肪などはこの三者を助けるために存在するようなものである。そして、神経とは知力と感覚の器械であり、筋と骨とは観念を外面に表出する器械である。したがって、動きたくても、手足がなければ動けない。また、心に喜悦の情感があっても、面部の筋がなければ笑うことができない。下等動物は単に外物が身体に接触して刺激を与えれば、神経はこれに反応して身体を運動させるが、高等に進化するに従って、身体の運動は単に外物の刺激に反動〔「反応」のこと＝翻刻者〕して生ずるだけでなく、意識中の観念もまた、運動神経〔原文では「動神経」＝翻刻者〕を刺激し、筋骨の運動を惹き起すことがある。それゆえに、意識が発達するに従い、観念はますます外物の刺激と筋骨の運動との中間で、この二者の関係を非常に複雑にして、両者に直接的な関係を発見し得なくさせることもしばしばである。その理由は、人類においては意識の働きが、最も大きいので、たとえ外物の刺激が脳中に伝わっても、これにただちに反応せずに、その刺激を脳中で吸収し、後に自発的な活動をするからである。

脳の禁制

そもそも、脳中の禁制〔抑制、制止＝翻刻者〕とは何か。試みに、蛙（カエル）から脳を取り去り、この蛙に何物も接触させなければ少しも活動をしないが、もし外物の刺激を与えれば、これにただちに反応して手足の活動をするはずである。これに反して、脳を有する蛙が反応して活動する際は、前者のように著しいものではない。また、人類が睡眠し脳髄が働いていない時や髄脊（ママ）〔脊髄の誤植か＝翻刻者〕の一部が麻痺（まひ）して外物の刺激を脳髄に伝えない場合には、少し外面を刺激しても、ただちに反応を生じて痙攣（けいれん）を起こすことしばしばである。

元良勇次郎著作集

全14巻 別巻2

■監　修：大山　正
■編　集：『元良勇次郎著作集』刊行委員会
主幹：大泉　溥
委員：荒川　歩、小泉晋一、佐藤達哉、鈴木朋子、鈴木祐子、高砂美樹、西川泰夫、溝口　元（五十音順）
協力：岡田充博（漢文）

元良勇次郎（後列右より二人目）家族との撮影

●配本予定、定価

■**第一回配本**（2013年4月）　ISBN978-4-87733-749-0　揃定価37,000円（税別）

第1巻	初期著作：『教育新論』・Exchange・留学前後の論稿	定価9,000円（税別）	ISBN978-4-87733-732-2
第2巻	『精神物理学』・『生理的心理学講義』・欧米心理学の動向	定価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-733-9
第3巻	『心理学』・『心理学十回講義』	定価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-734-6
別巻1	元良勇次郎関係資料	定価12,000円（税別）	ISBN978-4-87733-746-9

■**第二回配本**（2013年12月予定）　ISBN978-4-87733-750-6

第4巻	『倫理学』・倫理問題教授法の調査	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-735-3
第5巻	論稿（1890～1900）心理学・教育・社会（1）	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-736-0
第6巻	論稿（1890～1900）社会（2）・哲学・倫理・宗教	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-737-7

■**第三回配本**（2014年12月予定）　ISBN978-4-87733-751-3

第7巻	『修身学』・『倫理講話』・『倫理及宗教』	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-738-4
第8巻	中島泰蔵共訳　『ヴント氏心理学概論』訂正再版	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-739-1
第9巻	論稿（1900～1905）心理学・教育・社会・哲学	予価9,000円（税別）	ISBN978-4-87733-740-7

■**第四回配本**（2015年12月予定）　ISBN978-4-87733-752-0

第10巻	『心理学綱要』・教育的心理学・東洋的自我	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-741-4
第11巻	論稿（1906～1912）心理学・注意練習・教育	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-742-1
第12巻	論稿（1906～1912）社会・哲学・倫理・宗教	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-743-8

■**第五回配本**（2016年12月予定）　ISBN978-4-87733-753-7

第13巻	論文集	予価8,000円（税別）	ISBN978-4-87733-744-5
第14巻	『心理学概論』（遺稿）	予価14,000円（税別）	ISBN978-4-87733-745-2

■**第六回配本**（2017年12月予定）

別巻2	著作集の解説・総索引（事項人名）、CD-ROM	予価17,000円（税別）	ISBN978-4-87733-747-6

A5判、上製函入、クロス装　ISBN978-4-87733-748-3（セット）C3311

〒103-0001　東京都中央区日本橋小伝馬町14-5　メローナ日本橋
☎(03)3808-1821　FAX(03)3808-1822　http://www.kress-jp.com/
株式会社クレス出版

●書店名